

---

---

# SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No.143 November 2015

---

---

## 研究の最前線

◆ JIBSN が地域研究コンソーシアム社会連携賞を受賞 ◆



授賞式の様子（右端が石垣雅俊・根室副市長）

11月1日（日）に地域研究コンソーシアム年次集会被開催され、境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) が第5回社会連携賞を受賞しました。JIBSNは2011年11月の設立以来、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」や境界研究ユニット (UBRJ) と密接に連携し、境界自治体の実務者と大学・シンクタンクの研究者の架け橋としての役割を果たしてきました。代表幹事である根室市役所から石垣雅俊副市長が参加し、受賞のあいさつを述べました。

JIBSNは国境自治体で毎年セミナーを開催してきました、近年、境界自治体でのインターンシップや国境観光振興など、メディアでも取り上げられる目に見える活動が活発化しています。今後とも、センターならびにUBRJはJIBSNと協働しつつ、日本の境界研究をさらに発展させてゆきたいと考えております。なお、この受賞については北海道新聞、毎日新聞でも取り上げられました。[岩下]

◆ 2015年度冬期国際シンポジウム ◆

スラブ・ユーラシア研究センター設立 60周年記念国際シンポジウムの開催

“Between History and Memory: Connecting the Generations at SRC 60”

「歴史と記憶の間：世代を超えて考える」

12月10日、11日の両日、センター大会議室で、センターの「還暦」を記念した標記のシンポジウムがおこなわれます。「歴史と記憶の間」というタイトルが示唆するとおり、プログラム作成に際しては、ジェイムス・ブライト (James Blight) とジャネット・ラング (Janet Lang) 両教授がハーヴァード大学ケネディー校で開発した「批判的オーラル・スタディ」の

方法を意識しました。この方法論の骨子は、最良の現代史研究のために、歴史的事件の当事者、アーカイブ資料、および口頭の証言と記述資料の双方を評価できるだけの知識を備えた歴史家を一つに集めるということにあります。

12月の札幌においては、センターのOB諸氏に1960年代から80年代にかけてのご自身の経験を語っていただくと同時に、より古い時期についての伝聞も披露していただき、さらに歴史としての完成度を高めるために、センター設立に関する日米の資料紹介もおこなわれます。センター自体の歴史とは別に、地域研究、スラブ研究、アニバーサリーや記憶研究、1950年代研究などを専門とする歴史家の方々にも、それぞれのテーマで研究報告をしていただきます。こうした諸研究を踏まえて、最終セッションではセンターおよび日本のスラブ・ユーラシア研究の今後の進路や課題について、討論がおこなわれます。セッションの半分はラウンドテーブルの形にしましたので、パネリスト同士の間でもフロアとの間でも、活発な議論がおこなわれることが期待されます。同時におこなわれる記念祝賀会も、また爽り多い議論の場になればと願っています。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

シンポジウムの現段階のプログラムは以下の通り。[文：ウルフ、訳：望月]

日時：2015年12月10日（木）～11日（金）10:00-17:30

会場：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター大会議室(403室) (発表は英語でおこなわれます)

1日目：12月10日（木）

10:00-10:15 開会の挨拶 田畑伸一郎 (SRC)

イントロダクション：デイビッド・ウルフ (SRC)

**10:15-12:00 Session 1: Multiple Approaches to Life and Text: Interdisciplinary Central Eurasia (roundtable)** 「生活とテキストへの複合的アプローチ：中央ユーラシア地域研究の学際性 (ラウンドテーブル)」

ダニエル・プライア (SRC) TBA

トヒル・カラダロフ (SRC) TBA

シュテファン・キルムゼ (SRC) TBA

モデレーター：長縄宣博 (SRC)

**13:15-15:15 Session 2: The Founding of the SRC and the Rockefeller Foundation** 「スラブ・ユーラシア研究センターの設立とロックフェラー財団」

デイビッド・エンゲルマン (ブランダイス大学、米国；欠席) (代読：長谷川毅)  
「第二次世界大戦とアメリカの地域研究」

デイビッド・ウルフ (SRC) 「北海道大学スラブ研究室設立とロックフェラー財団」

辛島理人 (関西学院大学) 「反共産主義リベラルと民主社会主義の間で：ロックフェラー財団と日本のアジア研究」

討論者：下斗米伸夫 (法政大学)

司会：地田徹朗 (SRC)

**15:30-17:30 Session 3: SRC in Time and Space: Ties to the Past, Links Across the Sea (roundtable)** 「時空を超える SRC：過去とのつながり、海を隔てた絆 (ラウンドテーブル)」

外川継男 (上智大学・北海道大学名誉教授) 「黎明期の SRC：前史について」

秋月孝子 (元 SRC 図書室司書) 「センター図書室でのスラブ・コレクションの構築」

伊東孝之 (早稲田大学・北海道大学名誉教授) TBA

長谷川毅 (カリフォルニア大学サンタバーバラ校) 「SRC、ペレストロイカそして露日関係」

ヴィクトル・ラーリン (ロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古学・民族学研究所) 「ウラジオストク歴史学研究所とスラブ・ユーラシア研究センター：爽り多き協力の30年」

田畑伸一郎 (SRC) 「21世紀のスラブ・ユーラシア研究センター」

モデレーター：岩下明裕 (SRC)

18:00-20:00 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター設立60周年記念レセプション (於：エンレイソウ) [招待者のみ]

2 日目：12 月 11 日（金）

10:00-11:45 Session 4: Other Anniversaries and Their Shared Context with the SRC 60th

「センター設立 60 周年の歴史的文脈：他のアニバーサリー／記念行事との対照から」  
高尾千津子（東京医科歯科大学；欠席）、デイビッド・ウルフ（SRC）「杉原千畝：  
ビザ発給から 75 年」  
泉川泰博（中央大学）「日本の独立外交の多面的追求と日ソ関係正常化（1955-56）」

討論者：和田春樹（東京大学名誉教授）

司会：木村汎（拓殖大学・北海道大学名誉教授）

13:00-14:45 Session 5: Anniversaries as a Maker of History & Memory 「歴史と記憶をつくる  
アニバーサリー」

ジョン・スタインバーグ（オースティン・ピー州立大学、米国）「ロシアの第一  
次世界大戦と革命：100 周年の発見」  
篠原琢（東京外国語大学）「チェコ共和国の記憶の政治におけるユダヤ人の存在  
／非存在」

討論者：池田嘉郎（東京大学）

司会：皆川修吾（北海道大学名誉教授）

15:00-17:00 Session 6: After ICCEES 2015: The Future of Japanese Slavic-Eurasian Studies  
(roundtable) 「ICCEES 2015 を終えて：日本のスラブ・ユーラシア研究の将来（ラウ  
ンドテーブル）」

沼野充義（東京大学）  
岡奈津子（アジア経済研究所）  
池田嘉郎（東京大学）  
ヤロスラフ・シュラトフ（広島市立大学）  
馮紹雷（華東師範大学、中国）  
河龍出（HA Yong-Chool）（ワシントン大学、米国）

モデレーター：林忠行（京都女子大学）

17:00-17:30 Concluding discussions 最終討論セッション

モデレーター：デイビッド・ウルフ（SRC）

組織委員会：デイビッド・ウルフ、田畑伸一郎、望月哲男、地田徹朗、高橋沙奈美

◆ スラブ・ユーラシア研究センタープレ・シンポ国際会議の開催 ◆

“Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian Viewpoints”

「ユーラシアから見た中東難民と欧州統合」

本年の 8 月末以降に、シリアなどからバルカン半島を經由して、欧州に押し寄せる難民が急速に膨れ上がり、その数は驚異的な値に達しています。経由地となった中欧・東欧諸国には大きな混乱が生じ、また EU 全体に難民受け入れをめぐる亀裂が走りました。欧州統合の象徴である「シェンゲン条約」が掲げる移動の自由は機能不全に陥り、全 EU 諸国の内部には政治的、社会的な対立が深刻化しています。難民問題は流入先の欧州情勢そのものを流動化させましたが、それに留まりません。たとえばトルコの EU 加盟交渉が再浮上し、またロシアがシリアへの空爆を開始しました。つまり中東地域と全ヨーロッパが連動して、世界史的大転換期ともいべき様相を呈しつつあるのです。

難民問題は第一次世界大戦にまで端緒を遡りますが、この根深い問題が、時間によって解決をみるところか、現状を揺るがし、将来の世界をも揺るがしかねない勢いです。本シンポジウムでは、関連地域の専門研究者が一堂に会して、時機を逸せず、広い視野に立って難民問題を議論し、ユーラシアの将来を展望しようと試みます。国際関係において、日本がこれまで担ってきた独自の役割があり、培ってきた研究業績があります。実践的に、かつ理論的に議論を深め全世界にむけて発信することには、大きな意義があります。

各位の参加と自由な議論に期待します。現段階のプログラムは以下の通り。[家田]

日時：2015年12月9日(水) 9:00-16:00

会場：北海道大学学術交流会館小ホール(発表は英語でおこなわれます)

開会の辞 井上紘一(北海道大学名誉教授)

**9:00-11:00 Session 1: Middle East and Europe in a Historical Perspective 「歴史から見た中東と欧州」**

黒木英充(東京外国語大学)、中東「避けられない波なのか?歴史を踏まえて考えるヨーロッパへのシリア(およびレバノン)移民」

Basak Kale(中東工科大学、トルコ)、トルコ

遠藤乾(北海道大学法学研究科)、欧州連合「難民対策におけるEUの複雑怪奇」  
野坂潤子(ビルケント大学、トルコ)、中東「黒海沿岸における難民と移民の200年再考」

討論者：佐原徹哉(明治大学)、バルカン

司会：家田修(SRC)、ハンガリー

**11:10-13:20 Session 2: Middle East Refugees and European Integration (roundtable) 「中東難民と欧州の現在(ラウンドテーブル)」**

今井宏平(明治大学)、トルコ「トルコの人道外交の有効性と限界：シリア難民への対応を例に」

錦田愛子(東京外国語大学)、パレスティナ「移動という選択：欧州諸国へのパレスチナ難民の移住」

Istvan Szerdahelyi(在日日本ハンガリー大使)

盛田常夫(立山R&DヨーロッパKFT)、ハンガリー「中東難民とヴィシエグラード4カ国」

Bostjan Bertalanic(城西大学)、スロベニア「スロヴェニアとバルカンから眺める難民情勢」

仙石学(SRC)、ポーランド「移民と2015年ポーランド総選挙」

司会：皆川修吾(北海道大学名誉教授)

**14:15-16:00 Session 3: Refugee Issue and the World 「難民問題と世界」**

Hans Carl Freiherr von Werthern(在日ドイツ連邦共和国大使)

Kemal Kiricsi(ブルックリン研究所、米国)、トルコ

山本忠通(国際連合、アフガニスタン担当事務総長特別代表)

梅原季哉(朝日新聞 欧州総局長)

Sven Chojnack(ベルリン自由大学)、ドイツ(来札未定)

司会：大津留厚(神戸大学)

◆ SRC編パンフレット『日本におけるスラブ・ユーラシア研究』 ◆

50カ国から約1300人の専門家が集っておこなわれたICCEES幕張大会には、センターも様々な形で関わりました。会場に設けたSRC出版物コーナーもその一つ。おかげさまで好評を博し、展示したほとんどの欧文出版物が帰国する研究者たちのバッグに収まりました。

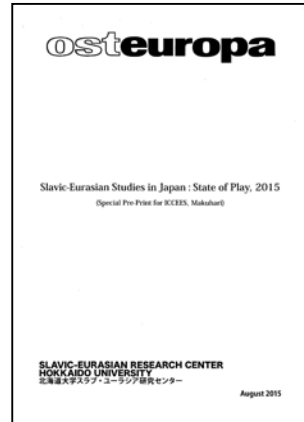
同じく好評をいただいたものに、センターで作成した日本のスラブ・ユーラシア研究の歴史と現状に関するパンフレットがあります。これは本来有名なドイツのスラブ研究誌 *Osteuropa* 2015年5-6号のためにセンターの複数の研究員によって書かれた論文で、本編は今秋にドイツ語で出版されましたが、それに先だってICCEES用に英語プレプリントとして編集したものです。大会組織委員会によってプログラム等と一緒に参加者に配付していただいたので、今後とも日本の研究状況に関する国際的な理解に役立つことを期待しています。

パンフレットは本文17頁の短い概観ですが、変化する研究状況を踏まえた展望も含まれていて、末尾は以下の文でしめくくられています(原文英語)。

「最近25年間の国際状況の激変を受けて、日本のスラブ・ユーラシア研究は広範囲にわた

る新たな諸問題に対応するため、国際研究や比較研究を含めた大胆な改革をこころみてきた。ソヴィエト共産主義はすでになが、レーニン主義国家は存続している。指令経済はすたれたが、国家の市場介入に関わる諸問題はいたるところでアクチュアルなものとして存在している。アジアの諸国家は独立したが、いまだに近隣大国への依存を脱するための葛藤を免れていない。北東アジアの地域主義、BRICS 国家の一つとしてのインド、北極圏、境界研究、温暖化—スラブ・ユーラシア研究はこうした事象をめぐる議論に役立つ何らかの知を提供できるし、日本でもまさにそのことが要請されている」

以下はセンターの領域横断的な著者集団 (Autorenkollektiv) による上記パンフレットの要点の概略です。



1. 戦前のスラブ学は、ロシア文化とりわけ文学の魅力を一一般に紹介する人文学と、敵国もしくは敵性国家としてのロシアを研究する実学とにはっきりと分かれ、後者は軍、外務省、および満鉄調査部を舞台としておこなわれていた。大学での教育・研究は、戦前は東京外国語大学、早稲田大学、大阪外国語大学などに限られていたが、戦後国立大学を含めた諸大学に徐々にロシア語をはじめスラブ語教育の場が形成され、人文学・社会学を含めた学術的研究が発展していった。1955年に誕生した北大SRCは今年で60周年を迎えた。現在日本のスラブ・ユーラシア関連研究者は約1500名(センター編纂によるスラブ・ユーラシア研究者名簿による)、国内関連学会は11に及ぶ。
2. 東西冷戦の終結がスラブ・ユーラシア研究に与えたインパクトは、欧米の場合よりも日本の方が強く、この地域の研究の必要性に関する広いコンセンサスが得られた。その結果研究費も増大し、ソ連崩壊後の新生諸国家に関する新しい専門家が育成された。
3. 新生国家群の分析的研究や位置づけという複雑な作業の過程で、政治学でも経済学でも比較研究が活況を呈するようになった。1993年5月に社会主義経済学会が比較経済体制学会と改称したのはシンボリックな出来事だった。
4. 国家間の比較研究や跨境的地域への関心の増大から、ボーダースタディーズのような新しい研究領域も誕生した。かつては国際関係学の一部の二国間関係論としておこなわれていた研究が、今や独立した研究分野として歩み出している。
5. 「帝国への展開」とグローバリゼーションの二つの流れは、ともに歴史研究に刺激を与え、歴史家たちは新たに開かれた地方や国家のアーカイブを意欲的に渉猟している。ロシアの資料を通じて、単にロシア内部の問題だけでなく、イスラムの復興、東アジアの経済的奇跡、冷戦といったグローバルな事象を解明するヒントを得ようとしているのだ。
6. 文学研究においては、専門家数も論文や翻訳の数も、伝統的にロシア語圏が優位を占めているが、中東欧圏や旧ソ連諸国に関しても、質の高い研究や翻訳紹介が進められている。この地域の政治・社会的変動が文化的アイデンティティに与えた影響を研究する目的もあって、文学研究を文化学の一環として位置づける志向が高まっている。スラブ語研究においても、国際化・地球化によって変化する言語環境とそこに形成される新たな言語アイデンティティや言語グループに研究の視点が向けられている。

(原文：ウルフ 翻訳：望月)

### ◆ パプコヴァさんの滞在 ◆

2014年秋にセンターの外国人特任准教授だったイリーナ・パプコヴァさんが、今回は11月20日まで日本学術振興会の外国人招へい研究者として滞在しました。ロシア正教会と現代ロシア政治に関する本を2011年に出して以降、彼女の研究関心は二つの方向で発展しています。一つは世界各地の正教会を取り巻く社会・経済的状況、もう一つはプーチン時代のロシアの隣国との関係、とくにグルジアとウクライナです。昨年は、後者の研究課題の一環として、

ロシアとウクライナの間歴史記憶をめぐる政治の研究に取り組みました。今回は、前者の研究課題の一環として、日本の正教会の現状を調査されていました。札幌、小樽、函館、仙台、東京、名古屋、京都、大阪を調査地とし、聖職者と教区の人々とのインタビューを精力的におこなわれていました。

なお、11月14日にはロシア史研究会の例会で、“St. Stalin? Post-Soviet Popular Canonizations and Historical Reality”と題する報告もおこないました。[長縄]

### ◆ 研究会活動 ◆

ニュース 142号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]

- 8月31日 宇山智彦（センター）“China’s ‘One Belt, One Road’ Strategy and Xinjiang: Impressions from the Conference Trip to Urumqi and Beijing”（昼食懇談会）
- 9月4日 第14回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 宇山智彦（センター）「比較帝国論から見る大国・小国関係：グレートゲームからウクライナ紛争まで」
- 9月7日 Umur Korkut（センター）“Resentment and Re-organization: Anti-westernism for Conservative Social Control in Hungary”; Timur Dadabaev（筑波大）“Vision of Self/Other in Constructing New Eurasia”（SRC特別セミナー）  
Ryszard Zajackowski（ヨハネ・パウロ2世・ルブリン・カトリック大、ポーランド）“The Experience of Polish Exile: The Case of Joseph Wittlin”（SRCセミナー）
- 9月16日 大場佐和子（神戸大・院）「日本の最高裁判所との比較から見るチェコ憲法裁判所：司法積極主義？司法の政治化？」（鈴川・中村奨励研究員研究報告会）
- 9月18日 北極域研究センター、スラブ・ユーラシア研究センター共催セミナー Kamrul Hossain（ラップランド大、フィンランド）“Governance of the Arctic: What Future Do We See?”
- 9月29日 長沼秀幸（東京大・院）「カザフ草原の『併合』をめぐるロシア帝国の論理：1830-40年代におけるオレンブルグ要塞線の拡大過程の分析を中心に」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 10月14日 Elza-Bair Guchinova（サントペテルブルグ・ヨーロッパ大、ロシア）「愛しのソ連を後にして：時代のドキュメントとしての日本人捕虜の感謝のアルバム（ロシア語）」（SRC特別セミナー）
- 10月15日 第三回異分野連携勉強会 田畑伸一郎（センター）、後藤正憲（同）「ロシアのヤマロ・ネネツ訪問談：ガス開発地域の持続的発展の可能性」；立澤史朗（北大文学研究科）「シベリアにおける生物多様性と野生生物の保全について」
- 11月6日 Ilia Altman（ロシア・ホロコーストセンター）“New Documents and Perspectives on Chiune Sugihara: Results of Russo-Japanese Cooperative Research”（SRCセミナー）

## 現代中欧におけるエスニック・アイデンティティの生成：シロンスクを題材に（連載3回中2回目）

ズビグニェフ・グレン（ワルシャワ大学、ポーランド）

私の講演の次の部分では、シロンスクを例にして、集団規模でのアイデンティティ構築のプロセスについて、グループとしてのアイデンティティのさまざまなレベルに言及しながら、考えたいと思います。ただし、自らを「シロンスク人」と定義するグループが、現在義務付けられている法律と社会的・政治的規範に照らしたとき、地域的なグループを構成するのか、エスニック的なグループを構成するのか、はたまた民族的なグループを構成するのか、という問いへの回答を試みることは、——今回の講演の目的ではありません。民族形成プロセスの分析にとって根本的なのは、次の問いです——あるグループが、エスニック的な（そして／または民族的な）特徴を帯びたより大きなグループの内部で、地域的な特徴ではなくエスニック的な特徴を、歴史的な意味で獲得するのか、またはある条件を満たすことによって、現代的な意味でそれを有しているのか。この問いへの答は、二通りの方法で求めることができます。

—グループ自身の観点から（内生的）

—外部の観点から（外生的）

回答は、同一のものであるかもしれませんが——他によって認められているエスニック的／民族的グループの場合がそうです。または、異なる場合もあります——認められていないグループの場合です（一部の人によっては認められているという場合もあります——例えば、長きにわたって、マケドニア民族がブルガリア／ブルガリア人に認められなかったことと比べてみましょう）。一つだけ確実なことがあるようです——外部（周囲）は、あるグループに対してそれに同意するように提案する、あるいはそれを強制させようとしたとしても、そのグループが自ら同意しない限りは、それをエスニック・グループとは認めないということです。例えば、社会的な実践において、第二次世界大戦中の、グラル民族（Goralenvolk）と河岸の民族（Wasserpöckler）という概念の導入は、民族登録という行政の裏付けを必要としました。すなわち、この概念は行政的に強制されると同時に、一部の個人によって受け容れられてもいたということです（署名をすることによってです。もっともこれは、別の複雑なテーマです）。

通常、エスニック・グループ形成と民族形成のある種のプロセスは、グループ内部で始まり、次にその申し出が外の世界によって「考慮の対象として取り上げ」られます（特に、隣人、同じ地域の住民／市民によって）。このプロセスはグループ自らの内部、グループ構成員の意識のなかで始まりますが、それは他の構成員によって、グループの精神的領域で共有されるのです。

個人は、自らの独自性についての意識を獲得または（すでに持っているものとして）発見し、自らをグループとしての差異システムの内位置づけます——社会的次元においてこれを果たすのはグループです（必ずしも、それが例外なしに行われるわけではありません）。このようにして規定された個人的・グループ的意識は、主体的アイデンティティの一要素となり、心理面において自らを異質と認める指標となります。それは、象徴的・現実的にアイデンティティを作り上げる要素（言語、象徴、伝統、歴史、さらには、地域、境界、グループの利害関係即ち経済関係）から構成されています。グループの個別性を構成する要素の一覧は、歴史的・文化的に条件づけられています。民族としての地位を志向するグループが満たさなくてはならない必要条件を定義しようとする試みもありますが、こうした条件の一覧そのものは、ある程度強制的なものであることもありますし、常に正確に定義できるわけでもありません。こうした条件は、一定の社会的・政治的現実から導き出されるので、一様でも繰り返されるものでもないからです。この理由からだけでも、普遍的な規範を定める試みは、最初から失敗を宣告されているのです。ここで述べようとしている民族形成への条件の組み合わせは、ある程度は開かれた——エスニック的・民族的な意味でグループを形成するものとしてあり得る要素から成る——一覧として扱うべきであり、あらゆる場所と時代において、すべてのグループを義務づける、閉じられた一覧ではないのです。最低限言えるのは、より広い文化的地域——例えば、ヨーロッパ的規模、欧州・大西洋規模でのエスニック的条件——が存在するという事です。さらに考慮に入れるべきは、場合によってはそれが動的になり得るという側面、すなわち諸条件の組み合わせは時代によって変わり得るという側面です。例として、19世紀においてスラヴ民族は4つの種族／集団に分類して把握されていたこと（チェコ・ポーランドとロシア・セルビア）と比較してみてください。

今回の講演では、他のグループの間における自らの居場所の意識というエスニック的なレベルにおけるグループ構成的な側面だけを、考察することにしましょう。グループとその構成員（場合によっては、代表者のみ）自らが、自らをより大きなグループ内の地域グループと見なしているのか、独立したエスニック・グループと考えているのか（ここでは、大陸または人類といったより大きな段階におけるアイデンティティは考慮に入れませんが）、すなわち、自らをさまざまなグループの階層のなかのどこに位置づけているのか、自らのグループを他

のグループからどのように区別しているのかです。この場合に用いられたメカニズムは、むしろ、「内」と「外」の区別に依拠しています。それは、世代から世代へと伝えられる文化的記憶の一部分です。肝心要は、この記憶の範囲であり、記憶は時代によって変化するということが同様です。

分析の対象とされるグループを定義するための公分母は、エスニック・地理的名称の根拠を成す地理的概念、すなわちシロンスクです。これは、地域です——シロンスクの人間としての自らのアイデンティティを定義しようとする個人だけでなく、それができるにもかかわらずしようとしめない個人が、この地域に住んでいるという事実それ自体によって、アイデンティティの根拠とすることができる場所です。同時にこれは、比較的捉えやすい基準でもあります——地域の境界線を定義することも可能です。ただし、ここですでに、(国境が歴史的に可変であることとの関連で)歴史的な境界線か現代の境界線かという、条件の二重性が問題になります。私たちは、現代におけるアイデンティティの定義を試みているので、ここでは現代における境界線を取り上げましょう——とはいえ、歴史上の地理という条件を含む、歴史的な条件が存在することを忘れないようにしましょう。私たちがここで論じているのは、主観的なプロセスに関わる問題ですから、地理学的な意味での地図だけでなく、一般の意識における地図(メンタリティの地図)をも考慮に入れることが大切です。

現代のシロンスクを構成するのは、次の地方です——上シロンスク(シロンスクのオポレ地域も含まれます)、下シロンスク、シロンスクのチェシン地区(ザオルジェ、シロンスクのベスキド、シロンスクのオパヴァも含まれます)。シロンスクが占めている領域と自己同一化することに関していえば、この地域に生まれたすべての住民は、感情的にこの地域と結び付いていると感じているのかもしれませんが、ではどの程度感じているのか、どのようなシステムにおいて感じているのか——答えを待っているのはこの問いです。

この問いに答える試みを行うに際して、この地域におけるアイデンティティ問題の伝統的な解決法を考慮に入れる必要があります。

近代的なエスニック・アイデンティティの自覚について、私たちは、近代的な民族概念の形成プロセスと関連させて論じることができます。通常は、それが19世紀のロマン主義時代、特に「諸民族の春」と関連したあるプロセスの高まりにその起源を持つとされています。

心理的な要素すなわち民族的自覚という要素を、機械的に解釈された領域的な要素の代わりに、民族形成要素の一覧に加えることで、ある地域に共同で生活している複数のエスニック・グループを抽出するうえでの、ある種の混乱が引き起こされました。象徴的な世界における境界、グループ間の境界を定めなくてはならなかったからです。それは、伝統、歴史、言語、習慣などの象徴の世界でお互いに近いグループほど、困難でした。エスニック・グループを取り出す困難の一例が、多言語的な(現代的な意味で、多エスニック的でもある)シロンスク地域です。

19世紀には、この地域住民にとって支配的であろうとした、国家形成を志向する(国家としての伝統を持っていた)3つの民族が競い合っていました——ドイツ、チェコ、ポーランドです。それぞれが別の条件を持ち出しました。ドイツは行政的・文化的な条件です。言語という要素を除外したうえでのドイツ文化への帰属——ポーランド語または混淆した言語で話すドイツ人、場合によってはオーストリア人というカテゴリー——です。シロンスクのチェシン地域に住むチェコ人が提出したのは、歴史的な条件でした——ポーランド王国[1386 - 1795]のチェコに帰属していたことです。ポーランドが提出したのは、エスニック的・言語的そして文化的な条件です——言語、場合によっては文化的に「ポーランド性」と結びついていること。こうした思想的な軋轢のなかで、第4案も現れました——独立シロンスクです。根拠となったのは領域であり、グループの言語上の指標とされたのは、ポーランド語とドイツの二重言語性でした。例として、ウトラキスト派の学校、または、グループの言語的自立性(混淆した言語



——シロンスク語をクレオール語ととられる現代の理論を参照のこと）という問題についてお考えください。状況が複雑になったのは、ポーランド、ドイツ、チェコというそれ以外のグループの内部においても、こうした自己同一化が現れたことです——それぞれ、ポーランド、ドイツ、チェコという地域に対応して、それに同伴するものとして。

エスニック的・民族的自覚とその形成を分析するに際して、少なくとも二つの研究対象を区別する必要があります。一つは、エスニック的・民族的自己同一化という問題が根幹



鶴岡八幡宮（向かって左がロムアルド・フシチャ氏、右がズビグニェフ・グレン氏）

をなす問題であるとははいえないにせよ、重大な問題であるような人たちです。すなわち、当時の19世紀の知識人と上流階級です。その正反対に位置づけられるのが、こうしたエスニック的カテゴリーの提案の受け手ですが、彼らは、さまざまな方法でさまざまな時代にこうした提案を利用しました。この「大衆」とその自己同一化上の特徴が、国勢調査に反映するのです。

19世紀の国勢調査では、登録される主体の意志に対して、エスニック的グループに算入する代替的な概念が用いられました。エスニック的特徴の指標とされたのは、母国語——家庭内での言語、最初に習得する言語——でした。これによって、ある意味で、個々の人々は民族選択の責任を免除されました。こうしていわゆる「一般」住人は、外から、自分らがどの民族に属しているかを知らされたのです。自らのアイデンティティに明確な関心を持つ個人だけが、百パーセント意識的にそれを行うことができました。国勢調査、さらには国会選挙においてそれが次第に一般化しはじめると、民族的自覚が示されるようになりました——所属する民族を名乗り出ることによってですが、その際重要な役割を果たしたのは、すでに民族意識を持った個人とそのグループ（民族主義者、民族主義政党）でした。ポーランド、チェコ、シロンスクの民族の生命を覚醒させようとする人々が一般大衆を率いるというプロセスは、国家への帰属や用いられている言語を基に国勢調査担当の官吏が指示する、といった外的な要素を決定的なものに見なすそれまでの習慣に反していたので、その進行にはかなりの抵抗を伴いました。その証左は、その後の国勢調査の結果が、一般住民の民族意識が流動的であることを記録していることです。この現象は「転向（転換）」という語で定義されていますが、現実には感じられない、またはさほど深くは感じられていない概念の領域において、「転向」が可能であるかは答えの出されていない問いです。むしろ、アイデンティティの自覚という観点からいえば、かくも多数の大衆が民族への帰属を容易に切り替えられるということは、それが近代的な意味の民族以前のレベルにとどまっていたことを証明しています。単にここまたはシロンスクへの、地方的または地域的な帰属意識だったものには、永続的な特徴がありました。それ以外の特徴は、事実上それ以前の地域的な所属というシステムのうちに留まっていたのです。それは、近代においては、境界線の転変と結びついていました——それが、民族・国家の一単位と恒常的な感情的結びつきを生むことを不可能にしていたのです。たった一つの恒常的な要素は、故郷の地理的・文化的な風景への帰属意識で、それが地方の、この、場合によっては地域の、シロンスクの風景と解釈されたのです。

一方、グループの自己同一性をめぐる現代の問題は、知識人グループだけでなく、より幅

広い大衆が自己同一化という主体化を行うプロセスが起こっていることに起因しています。これはむしろ、対人、グルーブ内、対グルーブのあらゆる関係の実現が容易になったことと関係しています。従って、シロンスクのアイデンティティとその定義に伴うプロセスが、インターネット時代に、インターネットを介して始まったのは偶然ではないのです。今日になってようやく、意識的に、政治的状況に強制されることなく、己れのアイデンティティを選択し、それを宣言するための条件が存在するようになった——あえてそう断言してもよいかと思えます。もちろん、今でも、オピニオンリーダーと呼ばれる、一定の提案を行い、それをSNS、実践活動（出版、ウェブページ、言語活動）、法的活動（シロンスク民族連盟結成の提案）といったさまざまな手段で宣伝する人々の役割は、いくら大きく評価してもしすぎることはありません。しかし、それでも、然るべき決断を行うのは、こうした申し出を受け取る人々なのです——彼らはそれを受容する、または拒絶します。（ポーランド語から久山宏一氏訳）

## 学 界 短 信

### ◆ 学会カレンダー ◆

- 2015年12月5日 「東北アジア地域研究の新たなパラダイム」 於仙台国際センター  
[http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2015/news150823\\_02.html](http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2015/news150823_02.html)
- 12月10-11日 スラブ・ユーラシア研究センター 2015年度冬期国際シンポジウム「歴史と記憶の間：世代を越えて考える」（兼センター設立60周年記念行事）
- 2016年4月13-16日 第58回 Association for Borderlands Studies (ABS) 年次大会 於リノ  
<http://absborderlands.org/studies/annual-meetings/> [大須賀]

## 編集室だより

### ◆ Acta Slavica Iaponica ◆

37号には論文14本、研究ノート1本、書評6本の投稿がありました。現在編集作業中です。  
[野町]

### ◆ 『スラヴ研究』 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第63号への投稿は8月末で締め切られました。10件の応募があり、2016年春の発行を目指して現在審査をおこなっています。[長縄]

## 会 議 (2015年7月)

### ◆ センター協議員会 ◆

2015年度持ち回り 9月18日（金）～9月28日（月）

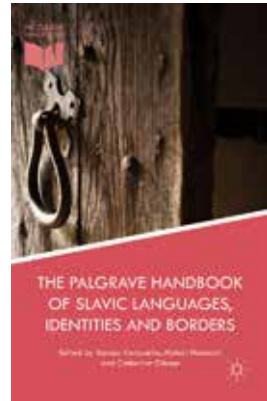
- 議題
1. 教員の人事（岩下教授のクロスアポイントメント）について
  2. 受託研究の変更について

[事務係]

# みせらねあ

◆ Tomasz Kamusella, Motoki Nomachi and Catherin Gibson (eds.) ◆  
*The Palgrave Handbook of Slavic Languages, Identities and Borders*  
 が Palgrave Mcmillan 社より刊行される

この著作は、「境界」や「アイデンティティ」をキーワードとして、スラヴ諸語の現状や歴史を、(社会)言語学、歴史学、文化人類学など様々な分野を専門とする研究者が論じるものです。これはグローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」において、歴史学を専門とする Tomasz Kamusella 氏と言語学を専門とする野町が原案を作ったもので、言語を題材とした境界に関する学際的アプローチの試みと言えます。執筆者はヨーロッパ、北米、日本など合計 18 ヶ国 25 名で、序文はケンブリッジ大学の Peter Burke 氏が寄せてくださいました。本著作にはセンターが組織したシンポジウムや講演会の原稿がもとになっているものも多く含まれており、GCOE で大きく展開したセンターの言語に関する国際共同研究の一つの成果とも言えるでしょう。詳しい目次は以下の出版社のページをご覧ください。[野町]



<http://www.palgrave.com/page/detail/The-Palgrave-Handbook-of-Slavic-Languages-Identities-and-Borders/?sf1=barcode&st1=9781137348388>

## ◆ 人物往来 ◆

ニュース 142 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。  
 [田畑／大須賀]

- 9 月 7 日 Timur Dadabaev（筑波大）、Ryszard Zajackowski（ヨハネ・パウロ 2 世・ルブリン・カトリック大、ポーランド）
- 9 月 18 日 Kamrul Hossain（ラップランド大、フィンランド）
- 9 月 29 日 長沼秀幸（東京大・院）
- 11 月 6 日 Ilia Altman（ロシア・ホロコーストセンター）

## ◆ 研究員消息 ◆

宇山智彦研究員は 2015 年 8 月 14～22 日の間、“The Forum on the Development of Xinjiang 2015” および “CASS Forum 2015” への参加のため、中国に出張。

岩下明裕研究員は 8 月 16～22 日の間、“IGU Regional Conference 2015” 出席、研究発表、意見交換及び研究打合せのため、ロシアに出張。9 月 10～15 日の間、モニターツアー参加による現地調査、意見交換及び研究打ち合わせのため、ロシアに出張。10 月 6～9 日の間、国際カンファレンス “Crossing the Division and Borders: Transnational Networks and New Directions of Unification in Korea” への出席、研究発表及び研究打合せのため、韓国に出張。

田畑伸一郎研究員は 8 月 17～22 日の間、聞き取り調査、意見交換及び資料収集のため、ロシアに出張。

家田修研究員は 8 月 20 日～9 月 3 日の間、リポジトリ事業関連についての現地研究者との意見交換および資料収集のため、英国、ウクライナ、タイに出張。

野町素己研究員は 8 月 20 日～9 月 3 日の間、現地調査及び資料収集のため、セルビアに出張。

望月哲男研究員は 9 月 15～21 の間、カンファレンス “Photographing Asia: Images of Russia’s Orient and the Far East in the 19th and 20th Centuries” への参加及び研究発表のため、ドイツに出張。[事務係]

## 目 次

研究の最前線 .....	1
JIBSN が地域研究コンソーシアム社会連携賞を受賞 / 2015 年度冬期国際シンポジウム スラブ・ユーラシア研究センター設立 60 周年記念国際シンポジウムの開催 “Between History and Memory: Connecting the Generations at SRC 60” 「歴史と記憶の間：世代を超えて考える」 / スラブ・ユーラシア研究センタープレ・シンポ国際会議の開催 “Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian Viewpoints” 「ユーラシアから見た中東難民と欧州統合」 / SRC 編パンフレット『日本におけるスラブ・ユーラシア研究』 / パプコヴァさんの滞在 / 研究会活動	
現代中欧におけるエスニック・アイデンティティの生成：シロンスクを題材に (連載 3 回中 2 回目) by ズビグニエフ・グレン.....	6
学界短信 .....	10
学会カレンダー	
編集室だより.....	10
<i>Acta Slavica Iaponica</i> / 『スラヴ研究』	
会議.....	10
センター協議員会	
みせらねあ.....	11
Tomasz Kamusella, Motoki Nomachi and Catherin Gibson (eds.) <i>The Palgrave Handbook of Slavic Languages, Identities and Borders</i> が Palgrave Mcmillan 社より刊行される / 人物往来 / 研究員消息	

---

2015 年 11 月 30 日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	望月哲男
発行者	田畑伸一郎
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： <a href="http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/">http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/</a>

---